

シンポジウム「霧ヶ峰に学ぶ」

信大が11日に諏訪市で

シンポジウム「霧ヶ峰に学ぶ」人間と自然の微妙なバランス上に成り立つ霧ヶ峰の自然環境について、これからの保護・保全や活用のある方などを考える。

シンポジウムは午前と午後の二部構成。午前十時からの開会式に続いて、霧ヶ峰みらい

協議会座長で信大名誉教授の土田勝義さんによる基調講演「霧ヶ峰の今とみらい」霧ヶ峰みらい協議会の設立経緯と今後の展望」と、

同大の小宮山淳学長、小坂共栄副学長による特別講演を行う。午後一時からは、同

大理学部物質循環学科の島野光司准教授をコーディネーターとして、パネル・ディスカッション「霧ヶ峰から何を学ぶのか」先進事例の取り入れ方」を開催。また二〇〇八年以来の自然環境診断マスタターの活動が報告される。

入場無料。問い合わせは同大理学部学生支援センターマイスター係（電0263・37・2440）へ。

時間となっている。試合の後には、懇親会を行い仲間同士親ほくを深めた。

サマーセミナー

11、12日に八ヶ岳自然文化園で

の八ヶ岳の八ヶ岳開く。十一日ら慶應義授の清水「光るメ」る講演とコンサー七時からさんのピトと講師談会。

十二日から「八歩く」とぐりをす

下諏訪町 で体育祭

県調理師会

青年部

第四十八回長野県調

消や親ほくを目的に毎年、各支部の持ち回りで開くスポーツ大会。五十歳以下の調理師免許保有者でつくる青年部主催で、諏訪をはじめ安曇野、佐久平、長野など十一支部から男女百二人が参加。十一

た。参加者は、声を掛けた。参加者は、声を掛けた。参加者は、声を掛けた。

同部は年々部員が減少傾向にあるといい、大勢の参加者と情報交換する体育祭は貴重な

生命科学を学ぶ会in原村主催の2009サマーセミナーin八ヶ岳「第六回生命の不思議を探る」光るメタカ」は、十一（土）十二（日）の両日、原村

の事務員6・74へ。

氏。

月三十日

た。

「5年ほど前から長野市街地でも頻繁に見られる」と同研究所。国土交通省は2007年度の「河川水辺の国勢調査」で、信濃町と新潟県妙高市、上越市にまたがる関川で初めて確認している。

野尻湖近くにある駒村さんの自宅は標高680mほどで、長野市街地などより高い。今月5日昼すぎ、庭で飛んでいる「一匹を見つげ、「どきどきしながら写真を15枚ほど撮った」という。ツマグロヒヨウモンは30分ほどで飛び立った。

駒村さんは約25年前から同町の自然や昆虫を撮影しているが、町内でツマグロヒヨウモンを見たのは初めてという。「写真に撮れたのはうれしいが、温暖化の影響による異常と考えると悩ましい」と話している。



霧ヶ峰をテーマにシンポ

諏訪で11日 環境活動に目を向けて

信大

信大(本部・松本市)は11日、シンポジウム「霧ヶ峰に学ぶー人間と自然の多様なかわり」を諏訪市文化センターで開く。霧ヶ峰の環境活動に携わる団体などによるパネル討論や土田勝義・信大名誉教授の基調講演がある。

シンポジウムは、自然保護や防災などについて提言できる人材を育てるために信大が

独自に設けた資格「自然環境診断マイスター」の養成講座修了生でつくる「しんリンク」が中心となって準備。講座で得た知識などを地域に還元しようとして、しんリンクが初めて

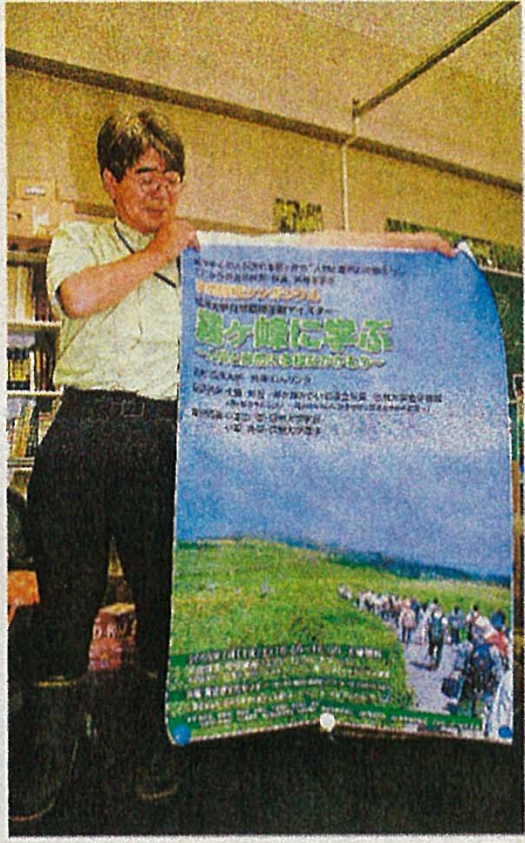
一般市民向けに実施する行事だ。30余りの環境団体がかわり、自然保護と観光産業の両立やニホンシカの食害といった問題を抱える霧ヶ峰をテーマに選んだ。

霧ヶ峰の自然と利用を考え

る「霧ヶ峰みらい協議会」の座長でもある土田名誉教授が、協議会の設立経緯や今後の活動の展望などを講演。パネル討論では、山小屋経営や植物保護指導員などで霧ヶ峰にかかわる5人が意見交換する。マイスター約40人と、霧ヶ峰で活動する十数団体のパネル発表もある。

養成講座の事業責任者、信大理学部佐藤利幸教授は「霧ヶ峰は人間と動物、自然の関係についての問題が集約された地域。討論やパネル発表でさまざまな立場の人の意見を知り、環境活動に目を向けてほしい」と話している。

基調講演は午前10時からで、パネル討論は午後1時から。入場無料。問い合わせは信大理学部マイスター担当(☎0263・37・2440)へ。



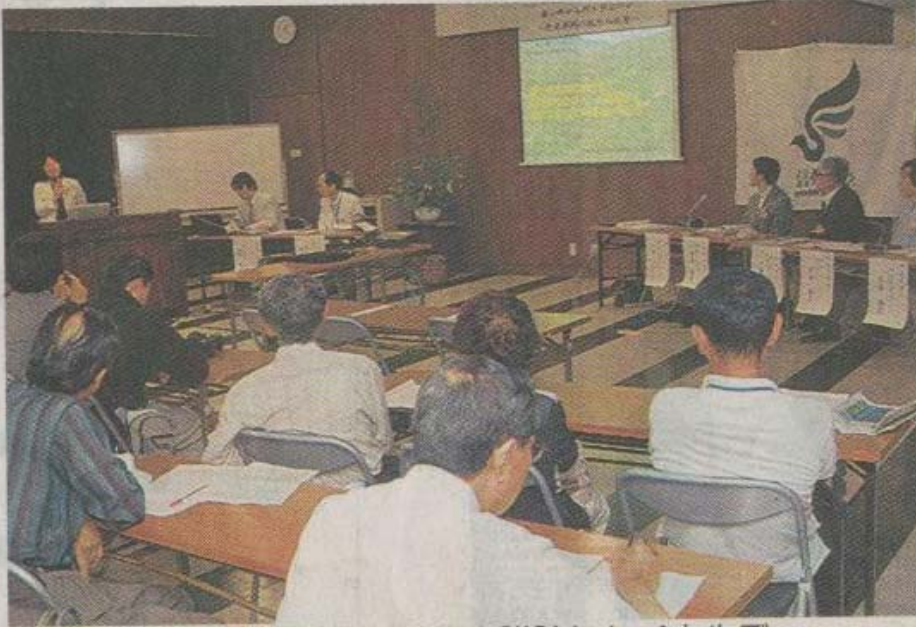
シンポジウム「霧ヶ峰に学ぶ」のポスターを持つ佐藤教授

北海道 9月は暖かく、天候も安定

霧ヶ峰を通し意見交換

信大が諏訪で「マイスター」初企画 環境シンポ

信州大は十一日、自「霧ヶ峰に学ぶ」(中
然環境シンポジウム「日新聞社など後援」を



霧ヶ峰の現状と課題を議論したパネルディスカッション＝諏訪市文化センターで

諏訪市文化センターで開いた。同大が二〇〇七年に設けた独自資格「自然環境診断マイスター」が初めて企画、運営した。

マイスターは自然環境問題の人材養成が目的で、これまでに県内外の五十人が講座を修了。人間と自然の関係を考えるため、草原や観光利用に人の手が加わってきた霧ヶ峰をテーマに選んだ。

信州大名誉教授で、霧ヶ峰自然環境保全協議会会長の土田勝義さんが基調講演、霧ヶ峰

の保全に携わる関係者らがパネルディスカッションをした。議論では、牧草採取で草原を維持してきた霧ヶ峰の成り立ちと森林化、ピナーライン開通で広がった観光利用などを論点に意見交換。信州大の大窪久美子准教授は、道路建設に伴い「乾燥土壌に外来植物が定着しやすくなった」と指摘した。

霧ヶ峰への関心は高く、八十人余が耳を傾けた。マイスター代表の竹重聡さん(五七)は「組織として議論の場を提供できた」と評価していた。(福沢幸光)

草原森林化 湿原乾燥化 鹿の食害

霧ヶ峰に学ぶ保護、活用

諏訪 信大が自然環境シンポ

信州大学は11日、諏訪、茅野、下諏訪の3市町にまたがる霧ヶ峰高原に焦点を当てた自然環境シンポジウム「霧ヶ峰に学ぶ」を諏訪市文化センターで開いた。講演やパネル討議で、草原の森林化や湿原の乾燥化、ニホンシカの食害などの課題を抱える霧ヶ峰に理解を深め、問題解決に向けた地元を取り組みから、今後の自然環境の保護と活用のあり方を考えた。

(鮎沢健吾)



霧ヶ峰から自然環境の保護と利用のあり方を考えたシンポジウム

用)の感がある」と指摘。バス利用を促進したり、ビーナスラインの再有料化を検討する必要があるとした。

基調講演した霧ヶ峰自然環境保全協議会座長の土田勝義信大名誉教授は、湿原に増える鹿の通り道について「雨水の水路となって乾燥化に拍車を掛けている」と解説。観光面の課題では7〜8月に利用が集中しているとし、分散を図る必要性を挙げた。

シンポジウムは、信大自然環境診断マイスター養成講座の修了生でつくる「しんりんく」共催。小宮山淳学長、県の白井千尋環境部長らも出席した。

霧ヶ峰にかかわる5人を迎えたパネル討議で、コーディネーターを務めた信大理学部物質循環学科の島野光司准教授は「霧ヶ峰の草原は里山の雑木林と同じような構造」と述べ、適度に手を入れて保全する必要性を強調。車山肩で山小屋を営む手塚宗求さん、諏訪市には、ニッコウキスゲの減少について「食害よりも高草植物の異常繁殖で太陽光が地表に届かなくなった影響が大きい」とし、火入れ(野焼き)の継続を訴えた。

植物保護指導員として、夏期パトロールを行う江戸川大学の宗像優志さんは「草原内への立ち入りも年々増えており、オーバーユース(過剰利